

ヘラクレイトスの認識論

後 藤 淳

人間科学部 国際交流学科
jung510@toua-u.ac.jp

〈要旨〉

本稿では、ヘラクレイトスにおける認識論について論ずる。議論の前提として、彼の認識論は自然学的宇宙論から切り離して考えることができず、あくまでも、後者の枠内での議論であることを了解しておかねばならない。

ヘラクレイトスは「魂（ $\psi\upsilon\chi\eta$ ）」を人間の認識主体とした。「魂」はアルケーである「火」と同様の質料的性質を持つことから、その変化に相応して人間の認識も恒常的に変化を蒙る。このような制約下でありながら、しかし「魂」には「自己成長するロゴスを持つ」（断片115）とされることから、能力の伸長可能性が人間に保証されている。

「認識すること」自体については、 $\delta\omicron\kappa\acute{\epsilon}\omega \rightarrow \gamma\iota\gamma\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega \rightarrow \phi\rho\omicron\nu\acute{\epsilon}\omega$ というように、認識対象に関してその「何であるか」をどのように自覚しているかに応じて、その内容が深化する。このことは、対象の皮相を「受取り思う」だけの状態から、「万物が一である」ことを覚知するという点までの認識活動における変化相を意味するものである。

彼による「万物が一である」という人間「知」の内容については、万物の「多」と「知」の「一」を接合させるものであり、「一と多の問題」という認識論が持つ課題に先鞭をつけるものである。彼によれば、「多」として顕現する事象があくまでも「火」の変化諸位相に過ぎない以上、「多」と「一」は同じものである。人間の質料的「魂」がその性質において最も「火」に近似した状態に保つとき、すなわち、その能力として $\phi\rho\omicron\nu\acute{\epsilon}\omega$ を発揮するとき、人間は対立的事象の中に「万物が一である」という「知」を見抜くことになるのである。彼の断片101を彼自身の「知」への到達宣言であると理解することにより、断片中において複数形で批判される人間たちの「知」との相違が明らかとなる。

はじめに

古代ギリシアにおける哲学の展開は、周知の如く、コスモスのアルケーを探る自然哲学から人間の内部へ、すなわち、人間の「魂」の在りよう、人間の認識一般や存在そのものの吟味へと展開した。前ソクラテス期の思想家たちにとっては、アナクシメネスにその萌芽を、クセノファネスにその発展を、そしてエレア学派はもとより、ヘラクレイトス以降の思想家たちの現存諸断片中に、そのような具体的言説を読むことができる。

人間の認識を巡って、その主体と客体そして認識方法、すなわち、人間の何が何をどのように知るかという問題については、B・Snellがヘラクレイトスの断片45「たとえ、すべての道をとって行くにしても、人は魂の限界を発見しないであろう。そのように深いロゴスをそれは持っている」という叙述の中に、「魂」が持つ「ロゴスの深み」という観点を提出することによって、人間が—少なくともヘラクレイトスが—自分の認識能力と認識内容の双方の無限定性、無限界性に覚醒したと

いうことを検証している。スネルの論点は、古代ギリシア人が論じた人間の「知」が、単なる経験的内容の量的総合を意味するものではなく、無限大へと拡散して止むことのない広がりと同時に、質的深化の必然的可能性を持つという視点にヘラクレイトスが立ちえたということを示すものである。

具体的な論拠としてSnellは、ホメロスに類出する接頭辞πολυ-（多くの）の使用を提示した。経験の多様さや蓄積という意味での「知識量」を意味するπολύιδρις（多くを知った）やπολυμήχανος（臨機の才ある）などがその例である⁽¹⁾。哲学以前の古代ギリシア世界における「知」ないし「知者」についての一般的用語を通して、未だ人間の認識や思考が量的多をもってその内容としていたことを明らかにしたのである。πολυ-という接頭辞を持つ用語については、ヘラクレイトスの断片40にもπολυμαθίη<πολυ+μαθίη>が見られ、それは「多くを学んだこと」つまり「博識」を意味する⁽²⁾。

さて、本論では、古代ギリシアにおける認識論の中でヘラクレイトスのものを取り上げる。上に述べたように、人間の何が何をどのように知るかという点を確認した上で、彼の到達した人間知である「一（ $\epsilon\nu$ ）」に関して検証したい。このことは、哲学における認識論の課題である「一と多」を巡る議論の端緒を検証することになると考える。

なお、本文並びに表1、注に使用する断片番号は、すべてH.Diels=W.Kranz. *Die Fragmente der Vorsokratiker*. Berlin. 1974¹⁷によるものとする。

第1章 「知る」主体

ヘラクレイトスにあっては、人間が何かを知るとする場合、それは人間の「魂（ψυχή）」が知るといふ働きを担うとされる。前ソクラテス期の思想家たちの中で、人間の認識能力について触れ、それを具体的表現として断片中に残している思想家は彼が最初であろう。127の現存断片中⁽³⁾で、僅か11個にすぎないとはいえ、彼は「魂」という用語によって人間の認識に言及している。幾つかの断片を引用しながら、彼が述べる人間の「魂」について確認する。

1 「魂」が質的に変化する状況に応じて、人間

の認識するという能力も変化を蒙る⁽⁴⁾

断片117. ἀνὴρ ὀκόταν μεθυσθῆ, ἄγεται ὑπὸ παιδὸς ἀνήβου σφαλλόμενος, οὐκ ἐπαίῳ ὄκη βαίνει, ὑγρὴν ψυχὴν ἔχων.

大人は<であっても>、酔っている場合には、成熟していない子供によって、躓きながら導かれる。（その人の）魂が湿っているがゆえに、どこに向かっているかを理解せずに<耳を傾けずに>。

断片77a. ψυχῆσι τέρψιν ἢ θάνατον ὑγρῆσι γενέσθαι.

魂にとって湿ったものとなることは、喜ばしきことあるいは死である。

断片118⁽⁵⁾. αὔη χυχή, σοφωτάτη καὶ ἀρίστη.

乾いた魂が、最も賢く最善である。

2 「魂」自体に限界はなく、それは「ロゴス」を持つ

断片45. ψυχῆς πείρατα ἰὼν οὐκ ἄν ἐξεύροιο, πᾶσαν ἐπιπορευόμενος ὁδόν, οὐτὰ βαθὺν λόγον ἔχει.

たとえ、すべての道をとって行くにしても、人は魂の限界を発見しないであろう。そのように深いロゴスをそれは持っている。

断片115. ψυχῆς ἐστὶ λόγος ἑαυτὸν αὐξων.

魂には、自己を成長させるロゴスが存する。

先ず、人間を含む万物が質料的自然、すなわち、コスモスの中に存在する以上、「魂（ψυχή）」も質量的規定を受けるものであるという前提にヘラクレイトスが立っていることを了解しておかねばならない。認識能力といっても、それはモノである「魂」のある時点での状態を意味するというのである。引用した断片の言説に従うならば、乾湿という対立的形容詞⁽⁶⁾が人間の発揮する能力の是非を判断する基準となることが分かる。

「魂」の質料的性質については、断片30、31a並びに31bに語られるコスモスの生成変化過程⁽⁷⁾と、断片76に語られる「魂」の変質過程⁽⁸⁾が－断片76の叙述の中には、いわゆる四元素の中の「空気（ἀήρ）」が欠落しているにしても－同じ内容を描

いている。このことにより、ヘラクレイトスがコスモスのアルケーである「火 (πῦρ)」と、人間が世界や自己自身を認める能力としての「魂」を近似した、あるいはほぼ同一の質料的性質であると考えていたとみなしうる。それは、彼が自然というマクロコスモスと人間というミクロコスモスを、同心円的位置にあるものとして捉えていたことを示唆している。さらに、断片30における「火は永遠に生きる (ἀείζων)」という表現から、人間の「生 (ζωή)」が「魂」に保証されることにもなる。すなわち、「生きている魂」を持っていることが、人間の認識作用の前提に置かれているのである⁹⁾。

さて、ヘラクレイトスは断片117では「魂」が湿っていれば理解するということが不可能となると述べている。「理解する」と訳された ἐπαίω < ἐπαίω という動詞が、本来「耳を傾ける」を意味するものであることから、「魂」がその火的な乾いた本来的性質を変質させることにより、人間の感覚能力が劣悪化するということをヘラクレイトスが考えていたといえるであろう。彼は、認識能力としての人間の感覚を決して認めていないわけではない。それは、ひとつの条件を満たしている限りで、人間の認識能力として是認されている。

断片107. κακοὶ μάρτυρες ἀνθρώποισιν ὀφθαλμοὶ καὶ ὤτα βαρβάρους ψυχὰς ἐχόντων.

バルバロスの魂を持つならば、眼や耳は人間たちにとっては悪しき証人である。

眼や耳といった感覚器官、あるいは視力や聴力といった感覚能力は、本来視認し知覚するという意味で「証人 (μάρτυρες)」たりえるのである。ヘラクレイトスは、外界からの刺激である認識情報を受容する働きを持つものとしての感覚器官の役割を承認している。しかし、「魂が湿る」ならばその能力は毀損されてしまうのである。

それでは、断片117における「湿った」という形容詞とは異なり、断片107に使われた「バルバロスの (βαρβάρους)」という形容詞は、「魂」のどのような状態を意味するのであるか。

一般的には、非ギリシア的である言語や人間を形容する、これが「バルバロス」の原義である¹⁰⁾。

語義からするならば、それは先ず、共通ギリシア語を理解できない人間にとっては、眼や耳という感覚器官も捉えた対象を正しく翻訳解釈できないということ、すなわち、その意味を理解できないということであろう。ここには、ギリシア人への狭隘な優越主義を読み取ることができるかもしれない。しかし、単にギリシア人対非ギリシア人という対置の中で、ヘラクレイトスが人間の「魂」の能力を論じていると考えることは誤りであるだろう。感覚器官の持つ能力は、それを構成する質料が本来の状態であって始めて正常な機能性を発揮するものだからである。それに加えて、断片117に述べられていたように、「魂が湿って」いては「知ること」が成立しえない¹¹⁾。「バルバロス」という形容詞は、ギリシア語を使用した理解が不可能であることに留まらず、その時点での「魂」の質料的性質が「火」的状态を保てていないことを含意するものであると考えることができる。理解を成り立たせうる共通言語を持ってはいるものの、時間と空間という論理構成の基準が酩酊により一時的に喪失されることを想起してみるならば、ヘラクレイトスの言わんとする「バルバロイ」の意味は首肯できるものである。

逆に、断片117に対比される内容を語る断片118では、二種類の最上級形容詞が「乾いた魂」に冠せられている。双方共に、最高の価値を表現するものである。しかし、ἀρίστη (最善) はまだしも、σοφωτάτη (最賢) は「魂」を直接修飾しうるであろうか。上に述べたように、「魂」がその質料的状態を「火」的なものとして維持する限り、すなわち、「乾いて」いる限り、その状態についてはἀρίστηであるだろう。コスモスのアルケーと人間の「魂」が共通な状態にあるからである。感官が捉えたコスモスの在りようを「知る」に際して、主体としての「魂」が「乾いて」いることは、無条件に「善き」ことに違いない。しかし、この「乾いた魂」は、果たしてσοφωτάτηなのだろうか。「魂が賢い」という表現には何か違和感を禁じえない。それは、質料としての規定を受けるモノである「魂」の性状を形容するに際しての違和感であるだろう。語義からする限りで、これを払拭することは無理である以上、われわれは、「乾いている」というよき性状にある「魂」がその能力を発揮する際の人間

の知的レベルが「最も賢い」という状態にあることをヘラクレイトスが意図していると考えざるを得ないであろう。「魂」は、乾湿という二極間で常にその性質を変化させているのであり、このことが人間の認識の正誤を根拠付けるのである。

さて、認識の主体である「魂」を考察するにあたっては、乾湿という質料的構成要素に加えて、「ロゴス」に触れねばならない。引用した断片45, 115においては、「魂」と「ロゴス」の関係が述べられている。まず、断片45においては、人間の「魂」に限界(πείρατα)がないということが示される。πείρατα<πέραςは、終了あるいは限度という本義であり、平面的な広がりを含意する用語である⁹³。「魂」が無窮の広がりを持つという比喩表現を受けて、断片は「そのように(οὕτω)」と一挙に「ロゴスの深さ」へと視点の変換をわれわれに迫る。断片前半部は、乾湿二極間での質的变化の多様性を示唆するのであろうか。それは、人間の自覚を遥かに凌駕する質的变化を「魂」そのものが蒙るということである。それに対して、後半部では「魂が深いロゴス」を持つというように、座標軸の変換が行われる。「広がり」と「深み」という両方向への無限界性の示唆は、ややもすると人間を不可知論へと誘うかもしれない可能性すら持つであろう。辿り着くことのできない営為を人間の前に開示しているとも考えうるからである。この点に関しては後述することにして、「ロゴスの深み」という点について考えたい。

ヘラクレイトスの現存所断片中に「ロゴス」という用語を含むものは、僅か11に過ぎない⁹⁴。しかし、各断片中においてその語が意味する内容は多岐に亘っており、一律な解釈は困難であると言わざるを得ない。このことは、まさにディオゲネス＝ラエルティウスが「謎をかけて語る者」として伝えるヘラクレイトスの姿を彷彿させる⁹⁵。かつて著者はヘラクレイトスの「ロゴス」の用法を、oratio(言葉を用いた表現や言い回し・言語)とratio(割合・定量性という原理)と解釈できるものへ二分した⁹⁶。俎上に載せている断片45の「ロゴス」は、oratioと解釈されるものである。というのも、一定の平衡性を意味するratioは、両端が限定されて始めて均衡といえるのであり、加えて、それを「深い」とは形容しないであろうからである。

断片45の「ロゴス」はoratio、すなわち言葉を用いた表現や言い回し、言語が担う意味と解されねばならない。この断片は、認識主体である「魂」自体が刻々とその質料的性質を変化させるが如く、人間の用いる言葉も変化するというを前提にしていると考える。既に述べたように、酩酊の中にある「魂」は、それが大人のものであっても未完成な子供のそれに劣ってしまう。このような場合には、「魂」の変化がたちまちにその能力の変化となる。他者の言葉が耳に入らず目にする文字も乱れ、自分の発する言葉も「バルバロス」化するのである⁹⁷。筆者は、ヘラクレイトスの「ロゴス」を近代的意味における理性と解釈することには躊躇を感じるものの、「魂」を人間の認識主体とする場合、それを認識手段としての「言語」—あくまでもヘラクレイトスにおいてはκοινόςであるが—として措定することは可能であると考えられる。さらに、断片115は認識の主体である「魂」に手段である「ロゴス」が座を占めるということを明確に提示すると共に、「ロゴスが自己成長する」と述べる。「ロゴスの自己成長」とはどのような意味であろうか。

断片115の「ロゴス」も「割合・定量性という原理」という意味での解釈は困難であるだろう。それは、断片45と同様に、「言葉を用いた表現や言い回し・言語が担う意味」と解されうるものである。そして、「言語が成長する」と意識する場合には、肯定と否定の両側面を考えねばならないであろう。

人間は身体的成長に伴い使用する言葉を、語彙を増加させていく。それは、いわばコスモスとの接触を契機として「魂」に座す「ロゴス」が拡大することであるとみなすことができる。「知る」とは、意味を付託できる「言語」を持つことと同義といえるからである。ひとつの対象を表現しうる複数の「言葉」を持ちうることは、人間の認識へ用語選択に立つ精確さを与えるであろう。この意味で「ロゴスは成長する」といえる。加えて、その成長は身体的成長に伴うとはいえ、後者が衰退に向かっても必ずしも同様に衰えるとは限らない。却って拡大し続けるのではないだろうか。複数の断片の中でヘラクレイトスが「ロゴスを聞くこと」を人々に喚起している理由も、人間認識の漸進がその大部分を負う経験の蓄積を重視せざるを得な

かったためであると推察できるのである。これら二点においては、「言語の成長」を肯定的に捉えることができるだろう。

このことと同様に、「言語」使用には、誤謬に陥るという否定的側面が付随する。上に述べたように、語彙を増加させていくことは、ひとつの対象を表現しうる複数の「言語」選択を誤り、対象の真実を却って遠ざけてしまう可能性を孕むということである。例えば、「リングは赤い」という場合、赤さの程度はどのくらいであるのかという疑問や、あるいは、そもそも赤くないリングも存在するという反論すら想定できるからである。このことは、より精確に正しく表現したいという「知」への志向が、逆にそれを人間から遠ざけてしまうことがありうると言い換えてもいいであろう。さらに、文字言語にしても音声言語にしても、言語に本来付帯している根本的な危険が存在する。それはすなわち、言語を表記する側や発声する側と、それを受け取る側との懸隔である。簡単に言うならば、「そのような意図ではなかった」とか「そのように理解してしまった」という、意味を解釈する上での齟齬が生ずるということである。「ロゴスの成長」における肯定的側面として述べた語彙の増加による表現の多様化は、同時に、ひとつの言語に託されたひとつの意味を、逆に曖昧なものにしてしまうという陥穽を孕むものなのである。

さて、人間の認識主体としての「魂」について纏めたい。先ずそれは、質料的規定を受けるものであり、自己の性状を「乾湿」二極間で多様に変化させるものである。そして、「乾いた」状態であればあるほど、それだけその本来的能力を発揮できるものである。このような質料的「魂」に「成長するロゴス」が存する。これは、人間が認識手段として用いる「言語」として位置付けられるものであり、語彙量の増加という観点からすれば水平方向へ、語義の深化という意味では垂直方向へ、限りなく自己展開する可能性を持つ。しかし、このような「魂」と「ロゴス」との関係は、なんらかの一定の対応に立つものではない。「魂」自体が常に変質し続けて止まないと同時に、「言語」自体も展開深化しながら揺れ続けているからである。ヘラクレイトスの認識論にあっては、「非ギリシア語 (βαρβάρος)」を使用し「湿った魂」を持つ人

間の様態から、「共通ギリシア語 (Κοινός)」を用い「乾いた魂」を持つ人間の様態を想定した上で、議論を進めねばならないであろう。

第2章 「知る」ということ

古代ギリシア語において一般的に「知る・認識する・理解する」を意味する動詞はγινώσκωであり、それは複数のヘラクレイトス断片中にも用いられている。以下にそれらをすべて引用する。というのも、文脈の中でのこの動詞の使用に、顕著な特徴を読み取ることができると考えるからである。その特徴は、ヘラクレイトスが人間の「知る」「理解する」という行為をどのように考えていたかを示すであろうからである。

断片97. κύνες γὰρ καὶ βαῦζουσιν ὧν ἄν μὴ γινώσκωσι.

犬は知らない人々に対して吠える。

断片5. καθαίρονται δ' ἄλλως αἵματι μαινόμενο, ὀκοῖον εἴ τις εἰς πηλὸν ἐμβὰς πηλῷ ἀπονίζοιτο, μαινεσθαι δ' ἄν δοκεῖοι εἴ τις μιν ἀνθρώπων ἐπιθράσαιτο οὕτω ποιέοντα. καὶ τοῖς ἀγάλμασι δὲ τουτέοισιν εὖχονται, ὀκοῖον εἴ τις τοῖς δόμοισι λεσχηνεύοιτο, οὐ τι γινώσκων θεοὺς οὐδ' ἥρωας οἴπινές εἰσι.

彼ら (=人々)は既にそれで穢れているときに、空しくも血で自身を清めようとする。あたかも、泥中に踏み込んでしまっている人が、泥で清めようとするかのごとく。もし誰かが、その人がそのようにしているのに気付くならば、その人は気が狂っていると思われるであろう。彼らはさらに、あたかも家たちと話しているかのようにこれらの像に祈る。一体に、神々や英雄たちが何であるかを知らないで。

断片17. οὐ γὰρ φρονέουσι τοιαῦτα πολλοί, ὀκόσοι ἐγκυρεῦσιν, οὐδὲ μαθόντες γινώσκουσιν, ἑωυτοῖσι δὲ δοκέουσι.

というのも、多くの人々は、そのようなことに出会っていても考えないのだ。彼らは、学んでも知らず (=理解

せず), 自分自身で思っているのだ。

断片86. ἀπιστήν διαφυγγάνει μὴ γινώσκεισθαι.
信じないことによって, 人は知らない
ことに気付かないのである。

断片28. δοκόντα γὰρ ὁ δοκιμώτατος γινώσκει
φυλάσσει.

最も評価を受けている人ですら, 思い
つくことを知っていて主張する。

断片57. διδάσκαλος δὲ πλείστων Ἡσίοδος,
τοῦτον ἐπίστανται πλείστα εἰδέναι,
ὅστις ἡμέρην καὶ εὐφρόνην οὐκ
ἐγίνωσκεν. ἔστι γὰρ ἔν.

ヘシオドスは多くの人々の教師であ
る。人々は, 彼が多くを知見していた
と信じている。しかし, 彼は昼と夜を
知らなかった。というも, それらは
ひとつなのである。

断片108. ὀκόσων λόγους ἤκουσα, οὐδεὶς ἀφικνεῖται
ἐς τοῦτο, ὥστε γινώσκειν ὅτι σφόν ἐστι
πάντων κεχωρισμένον.

そのロゴスを私が聞いた人々の中で,
誰も知が万物から切り離れたもので
あることを知るにいたっていない。

断片116. ἀνθρώποισι πᾶσι μέτεστι γινώσκειν
ἑωυτοὺς καὶ σωφρονεῖν.

すべての人間たちには, 自分自身を知
り思慮することが分かたれている。

これら8断片のうち6断片において, 動詞
γινώσκωは否定辞οὐ(οὐκ)あるいはμὴと共に用
いられている。さらに, 残り2断片のうち, 断片
28には否定辞は用いられていないものの, 最上級
が否定的讓歩-最高状態が形容されうるにしても
という意味で-を表現することから, ニュアンス
は否定的なものとして捉えられる。これらのこと
より, われわれはγινώσκωという動詞の使用に際
しては, ほとんどの場合において否定的文脈の中
でヘラクレイトスがそれを用いていることに気付
くであろう¹⁰。しかし, 最後に引用した断片116に
おいては, 彼は「知ること」が「すべての人間た
ちに分かたれている(ἀνθρώποισι πᾶσι μέτεστι)」
と語っている。このことは, その動詞を使用した
ほとんどの断片中で否定的文脈にそれを置いたへ

ラクレイトスが, 唯一, しかも「すべての人間た
ちに」とπᾶσι<πᾶνを付帯して強調してまでも, そ
の意味内容を担保したということである。第1章で
述べたように, 「魂」をその主体として「知る」と
いう行為を實踐する可能性を, ヘラクレイトスが
人間存在に認めているということである。「知る」
が否定的に語られる場合, そこには彼の考える人
間の「知る・認識する・理解する」ということか
らは乖離した内容が存していると考えることがで
きるだろう。各断片の内容を検証する。

断片97から始める。この断片は, 犬が吠えると
いう卑近な内容を語る。それは, ありふれた日常
的光景である。しかし, 主語である「犬(κύνες<
κύων)」が古代ギリシア社会において最低の生き物
であるとみなされていたことを思い出すならば¹¹,
断片の持つ比喩的意味が拡大することになる。犬
という最低の生き物は, 未知なる対象, すなわち
自分の経験の中になく対象(この場合は人間であ
る)に対峙した時には, それを警戒し拒否しよう
とするというのである。この断片は, 自分の狭隘
な経験知の中に留まることへの警鐘として捉える
ことが可能であろう。「知らない人々」に対して吠
える犬の姿は, 経験を越えた新しい対象に直面し
た際の人間自身の姿であろう。この断片は, 「犬」
を対照にすることによって, 安寧と既知なる世界
に留まることを求める人間への強烈な揶揄として
捉えることができるのである。

さらに, 既知なる対象に関する「知」であるに
しても, それをどのように理解しているかという
観点に立って, 人間たちを罵倒するものが断片5で
あるだろう。神々や英雄たちの像に向かって語り
祈る人間たちの姿は, 言葉の通じない家への語り
掛けや祈りでしかないというのである。祈ってい
る人間が本気であればあるほど, それを眺める人
間からするならば, その姿は滑稽であり悲惨です
らある。「空しくも」と訳出したἄλλωςという副詞
が「本来あるべき状態から逸脱した」という意味
を持ち, しかも, 単独で断片の前半におかれてい
る意味は大きいであろう。というも, 以下にヘ
ラクレイトスが語る事柄が, 「逸脱」すなわち「非
本来的」であるということ強く印象付けるから
である。宗教的儀礼としての流血を伴う行為が,
泥を用いての行為と何ら変わらないという彼の言

葉は厳しいものである⁹⁹。既知という枠内では当然で意義ある行為も、批判的眼差しの前では「狂気(μáινεσθαι)」に他ならないのである¹⁰⁰。しかも、この断片の重要性は、ただ単に既知なる「知」すらをもヘラクレイトスが批判しているということに留まらない。断片の最後に、なぜそのような奇矯なる愚行を行うのかという理由が語られている点に注目せねばならない。

「<そのような人々は>何であるか(τι οἴτινές εἰσι)」を知らぬということこそ、ヘラクレイトスが挙げる根拠である。神々や英雄たちの「何であるか」は、決して作られた像ではない。「～である」とわれわれの眼前に立ち現れたものは、その本質ではない。「知らぬ人間」に吠えかかる犬は、知らぬがゆえに吠えるのであった。しかし、知っていると思っている対象の「何であるか」を知らぬ時、実は人間は犬と変わらぬ状態にあるといえる。この断片は、人間の持つ敬虔さを罵倒することによって、その価値の皮相さすら示していると考えられるであろう。さらに付言するならば、「家と話しているかのように＝厳密には、家に向かって話しかけているかのように(τοις δόμοισι λεοχηνεύοιτο)」という比喩表現の中に、「ロゴス(言葉)」を理解せぬ「バルバロス」的人間をヘラクレイトスが見ているといってもいいかもしれない。

断片17と86は、「何であるか」を知らぬ人間について、その「知らなさ」の理由をさらに述べるものとして捉えることができる。断片17の「そのようなこと(τοιαῦτα)」という複数代名詞が具体的に何を示唆するかに関しては、研究者たちの間に統一的解釈は成立していない。本稿では、諸断片中にヘラクレイトスが列挙するさまざまな経験可能な具体的自然現象や人間たちを暗黙のうちに了解した代名詞であると考えて論を進めたい。

それでは、「出会っているἐγκυρεῦσιν)」つまり経験しているにもかかわらず、人々は誰一人として「理解しない」と彼が述べるとき、人は一体何を「理解しない」のであろうか。それは、先の断片5にあった「何であるか」に他ならないであろう。しかし、自分がそれらを直接経験しても、また誰かから何かから「学んでも(μαθόντες)」知らないと批判を受けるならば、人はその「何であるか」をどのようにして知りうるのであろうか。そ

もそも、「何であるか」とは一体何であるのか。いささか性急に問いを立てすぎたので、これらは後に論ずることとして、ヘラクレイトスによる人々批判の根拠を詳解しておきたい。

今述べた「何であるのかを知らぬ」という批判の根拠は、断片17と86における「自分自身で思う」「信じないこと(ἀπιστία)」であると考えられることができる。前者は、直前の「学んでも知らず」を受けていることから、自分勝手に対象を解釈することを意味するであろう。厳密に語義を勘案するならば、「自分で思っている、自分にはそのように映っている」ということである。学ぶことがその内容の反省までも含意するとすれば、「学んでも知らず」とは、出会った対象の表層が自分に投影するがままを受取るだけの状態に留まっていることである。このことが、断片の最初に置かれた「考えない(οὐ φρονέουσι)」という表現と表裏をなすことを考え合わせれば、ヘラクレイトスが人々の「知らない」ことを否定と肯定の二重表現により説明していると理解することができるであろう。

それでは、断片86における「信じないこと(ἀπιστία<ἀπιστία=ἀ+πιστία《πιστεύω》)」は、「考えないこと」「思っていること」と同意であろうか。この問いを吟味するために断片内容を逆転させてみたい。すると、信ずることによって人は知らないことに気付く、となる。「知らない」ということに関する覚醒の成否が「信ずる」「考える」ことに掛かっており、これならば「考える」「考えない」に置き換えることができそうである。敢えて断片17と86の意味内容を敷衍すれば、「人は経験的事物に出会いながらも、それが何であるかを考えない。自分に映じた姿をただ思っているのであって、たとえ学んだとしても自分が知っていないことに気付かないのである」と合わせ読むことができるであろう。このように、多くの人々は多くの事柄に出会いながら、すなわち「知る」機会に遭遇しながらも、顕現したそれらの皮膜把握をもって「知った」と「思っ」ており、その「何であるか」については「考えもしない」ことを確認した後、ヘラクレイトスは「最も評価を受けている人(ὁ δοκιμώτατος)」の「知」吟味へと進む。組上に上げられる人物はヘシオドスである。

ヘシオドスは、ホメロスと並んでその名が古代

ギリシア世界に膾炙した人物である。まさに、彼こそ「最も評価を受ける人」として足るに十分である。彼が人々に与えた影響をヘラクレイトスは「教師」という言葉によって表現している。人々は彼の中に「多くの知見 (πλεῖστα εἰδέναι)」をみていたのである。しかし、他の諸断片と同様にこの断片でも、ヘラクレイトスは世に言う「知者」を信じておらず、逆に痛烈に批判する⁽²¹⁾。ヘシオドスが「昼と夜を知らなかった (ἡμέρην καὶ εὐφρόνην οὐκ ἐγίνωσκεν)」からである。この批判は、ヘシオドスの著作である『仕事と日々 (Ἔργα καὶ Ἡμέραι)』を念頭に置いたものであるだろう。ἡμέρηという同一単語を用いることによって、ヘシオドス自身の不明さを際立たせていると考えられるからである。この断片の「彼は知らなかった」という言葉は、淡々としているだけになおさら冷徹さを帯びている。この断片は、多くの事柄を知見したという最高の評価を受けているヘシオドスという個人、さらに、その人を師とする多くの人々を同時に糾弾すると共に、その根拠に触れている。ヘシオドスは昼と夜が「一 (ἓν)」であることを「知らなかった」というのである。「何であるか」をこそ知って始めて「知」であるとするヘラクレイトスにとっては、対立的意味を持つ言葉であると(=により)理解している昼夜の同一性に気付いていないことは、「何であるか」の理解ではない、すなわち、「知らない」ことに他ならないのである。

しかし、果たして昼夜の同一性を理解することが、その「何であるか」を知ることなのであろうか。前章で論じたように、「ロゴス (言葉)」は肯定否定の二側面を抱えながらも、自己展開するものであった。わたしたちが言葉を知るとした場合、それはその意味すなわち定義を理解することであるだろう。言い換えれば、「何であるかを知っているか」という問いに対しては、その定義を与えることができることが解答となるということである。そうであるならば、われわれの眼からするとヘラクレイトスによるヘシオドス批判の根拠は不適切ではないかと疑うことができることになる。断片88⁽²²⁾に代表される複数の断片中、ヘラクレイトスは、人間がある事物を異なる視点から表現する際に対立的用語を用いるものの、時間的推移やそ

れらの相互変化—可逆的であれ不可逆的であれ—によって、一方がもう一方となりうることを示している⁽²³⁾。昼夜の同一性という主張も、全く同様にして説明できる。それらは相互へと変化しうるという点で、「一」である。しかし、やはり「何であるか」という問いの解答が「一」であるのか、という疑問は残ったままである。この問題に関しては、次章で「知」そのものを吟味する中で考えたい。

さて、γινώσκωが使われている残り2断片の検討に戻ろう。

断片108は、人々の「知らない」という現状を総括的に述べたものとして捉えることができるであろう。断片では、「そのロゴス (言葉) を聞いた中には (ὁκόσων λόγους ἤκουσα)」と一旦留保しながらも、οὐδείς (=no one) を主語にすることによって、ヘラクレイトスが「知」に到達した、あるいはそれを得た人間がないことが述べられている。また、この断片からは、このような一種傲慢とも受取れる言表をなす以上、彼自身には「知」への到達意識があることを推察しうる。いまそれは脇に置き、彼は「知が万物から切り離れたものである (σφόν ἐστι πάντων κχωρισμένον)」ということを言明している。これは一体如何なる意味であろうか。「知」とは何かに関して成立するものではないのだろうか。「切り離れて」しまっただけでは、最早「知」ではないのではなからうか。仮に、「知が万物から切り離れて」いるとすれば、それが「知」であることを何によって証することができるのであろうか。さらに、先の断片57で「一」とされた「知」と、「万物から切り離れた知」とは、同じ「知」なのであろうか。

これらの疑問は、先の「何であるか」という問いの解答が「一」であるのかという疑問と同じものである。ここでは、これまでの議論を踏まえて、他者批判の根拠にある「知」に関するヘラクレイトスの主張によれば、「知」そのものとは具体的事柄に即した個別「知」でも、またそれらの集団でもなく、それらとは全く異なったものであると彼が考えているということを確認するに留めたい。すなわち、「万物からかけ離れている」という表現の意味を、「万物とは全く異なっている」という意味へと置き換えることに留めたい。心に映じたま

まを受け取るδοκέωから、個別具体的な知見を得るというγιννώσκωへ、さらに「何であるか」について思慮するφρονέωへと人間「知」が論じられる中で、従前の理解とは異なる内容を持つという新たな視点からヘラクレイトスのいう「知」を捉える必要があることの示唆に留まりたい。

引用断片の最後においた断片116は、このような新しい「知」への接近を実現する可能性を人間全体にヘラクレイトスが保証したものである。質料的世界の中で安逸へと流れようとする本来的傾向を持つ人間であっても⁽²⁴⁾、また認識主体である「魂」すらもしばしば「湿る」ことにより「バルバロス」化するものではあっても、それでも「自己自身を知り思慮すること(γινώσκειν ἑωυτοῦς σωφρονεῖν)」は人間が発揮する認識能力として等しく与えられているのである。このことは、「分かたれている(μέτεστι<μετέχω)」という動詞が、例えば断片30におけると同様に⁽²⁵⁾、等量性や等質性を意味することからも、それが人間全体に遍く与えられた能力であることを読み取ることができると考える。

さてヘラクレイトスは、人間が「知る」ということ、すなわち認識活動について、その能力をδοκέω, γιννώσκω, φρονέωという三つの動詞によって区別していることが分かった。δοκέωは眼や耳といった感官を通して対象が「魂」に映じている状態であり、可感的対象も「魂」自体も変質し続けている以上、変化して止まぬ多様あるいは雑多を「思う」状態である。γιννώσκωは広義に「知る」ものではあるものの、多なる対象を個別に知見することであり、皮相的理解に留まるがゆえに未だ対象の「何であるか」に気付かぬ状態である。これらに対してφρονέωは一人間がそれを自覚しているにしていなくても一人間の所与としての最高認識能力であり、「万物から切り離れた知」へ接近到達するための思慮であると考えられる。

本章の最後に、引用した断片中にある複数の用語について、<言葉遊び(word-play)>を指摘しておきたい。多くの研究者たちも言うように、ヘラクレイトスは音韻の近接した用語による意味の意外性やその拡張、あるいは同一用語の中に別の意味を読むこと、さらに類義語を暗示することで

文全体の意味を多層化するといった表現手段を用いている。引用断片中に散見できるこれらを表1として後置することにより、引用していない諸断片との関連を示唆したり、引用断片そのものの解釈可能性を広げたりすることが可能となると考えるからである。

第3章 「知」の内容

本章では、これまで残してきた疑問について検討することを通して、ヘラクレイトスの認識論における「知」について論ずる。残してきた問題は以下のものであった。

- 1 「学んでも知らぬ」と人々が批判される根拠である「何であるか」とは如何なる意味であるのか。
- 2 「何であるか」は「昼夜の一であること」といわれるような対立的事象の「一」性であるのか。
- 3 「知が万物から切り離れて」いるとは如何なる意味であるのか。
- 4 ヘラクレイトスのいう「知」の妥当性確認。

これらの問題はすべて連続していることから、「何であるか」に関する検討から始める。第2章で述べたように、われわれ人間が「ロゴス」によって対象について「知る」という場合、それはその対象の属性を通して本性を認知することであり、その本性は言葉の定義を把握することであるだろう。「何であるかを知らぬ」とヘラクレイトスが人々を批判する場合、彼らが現象として顕現する対象に関して相対的認知に留まることを叱責しているのであれば、その批判は十分に同意できると思われる。変化して止むことのない対象の諸相を、同じく恒常的変質の中にある「魂」が「知った」としても、その「知」は次の瞬間には「知」としての妥当性を喪失しているだろうからである。「何であるか」という問いに対しては、本性あるいは定義による解答が与えられねばならないのである。

それでは、「何であるか」という問いに対して「一であること」と応ずることが解答たりえるのだろうか。ヘラクレイトスが「一である」あるいは「同じである」という表現を用いる断片は、い

わゆる「対立の一致 (identity of opposites)」について述べているものが多い。いまそれらの断片に挙げられている対立的事例に対して「何であるか」と問うとしよう。例えば、断片67における「戦争と平和」についてそれを問うとしよう。この時、わたしたちはそれぞれの言葉の定義付けを試みないであろうか。そして、おそらく「一である」とか「同じである」ということを思い浮かべることはないであろう。問いに解答すること自体が言語の持つ分析性に依拠することであるから、「何であるか」を考えれば考えるほど個別化へと進むのである。上に述べたように、対象も「魂」も変化する以上、ある意味でこの定義付けそのものも変わってしまうかもしれない、そもそも言語の記号性ということに勘案するならば、定義という個別化に確実性の保証はないとすらいえる。これらが *γινώσκω* の可能性でもあり限界でもある。

言語そのものの特性を踏まえた上で2と3の問題について考えたい。「何であるか」を定義付けるという意味で捉える場合、多様な対象からはそれぞれに対応した定義が結果する。Aとして表象する対象に対してはAであることが与えられる。これは「一である」ということではない。ヘラクレイトスのいう「一であること」は、言葉としてのロゴスからは帰結しないのではないだろうか。「一である」とか「同じである」という術語は、彼の「対立の一致」を説く断片に頻出することは既に述べた。自然学的宇宙論からするならば、生成消滅する万物、すなわち現象する個物の多様性は、アルケーである「火」の「交換物 (*ἀνταμοιβή*)」(断片90) にすぎない。言語により全く対立的に表現される現象ですら、「火」の変化であるという意味からすれば、それらは「一であり同じである」だろう。この場合、「一であり同じであること」を論拠付けるものは「火」の変化の *μέτρον* であり、それはロゴスの理法性や普遍性という側面である⁽²⁶⁾。ヘラクレイトスの「ロゴス」に「言葉を用いた表現・言い回し」という本来の語源学的意味に加えて、「割合・定量性という原理」という意味を、すなわち、彼の「ロゴス」に *oratio* と *ratio* という二面を読み取ることができることが2と3について解明する手掛かりとなるかもしれない⁽²⁷⁾。

*oratio*としての「ロゴス」は、それが聞かれ書か

れるものであり分析的に働くことを考えるならば、*δοκέω* あるいは *γινώσκω* という人間の認識領域において捉えられるものといえるであろう。それに対して、*ratio*としての「ロゴス」は、感官を通して得た与件情報を総括し総合するものと考えることができる。*φρονέω* から更に *σωφρονέω* へと繋がる人間の認識能力がこれに相当すると思われる。多様を各個に受容し分析する「ロゴス」と、細分化された情報を再び抽象し総合する「ロゴス」という、同時に相反する機能を同じ「ロゴス」という言葉が持つと考えねばならないであろう。ヘラクレイトス哲学の難解さが、その用語が意味する内容の重層性に存するとすれば、「ロゴス」に二つの意味を読み取り、人間と「ロゴス」との関連を認識という観点における二局面で解釈することができる。先の断片57におけるヘシオドス批判についていえば、昼と夜それぞれを説明できる「ロゴス」と、その相互交代という視点から「一であることや同じこと」にまで到達する「ロゴス」という二局面で解釈が可能となるということである。

「ロゴス」に分析性と総合性という働きを見るとき、人間の認識活動における両者の役割は異質なものである。しかし、ヘラクレイトスは「一であること」と見抜くこと、すなわち、抽象による総合に人間「知」を見ている⁽²⁸⁾。このことは、彼が人間の認識が共通なる内容へと収束しようと考えていたということであり、「多」から「一」へという過程に自然学的宇宙論と人間認識の共通性をみたということでもある。このことは、「火」が万物の「交換物」として「多」でありながらも常にアルケーとして位置付くことを知ることと、認識の多様な結果を「同じである」として抽象することが、同じ意味を持つということである。3に挙げた「知が万物から切り離れている」と「一」との関係は、「知が一である」という2の宣言に戻ることになる。第2章では、「切り離れている」という表現を「異なっている」と置き換えた。万物について「知る」ことなど人間には不可能であり、そもそも無意味ですらあるだろう。個別知の集合である「博識 (*πολυμαθία*)」はヘラクレイトスの拒否するところである⁽²⁹⁾。「何であるか」についての分析的知識量の多さは、必要ではあるにしても⁽³⁰⁾,

それが新たな総合知への踏切板にならないのであれば意味がない。分析知の多寡は総合知への視座転換の十分条件ではあっても必要条件ではない。そうでなければ、「最も評価を受けている人」や一般の人々に対する批判が反転した「一人であっても最もの人（ἄριστος）であるならば千万人に相当する」（断片49）という彼の賞賛は意味をなさないことになるからである。

「多なる知」を素材にして発出し、「一なる知」へと昇華することがφρονέωから更にσωφρονέωへと繋がる人間の認識の到達点であると考えねばならない。「一人であっても（その人が）最上の人であるならば」というヘラクレイトスが語る人間は、風聞により常識化した「最も評価を受ける人」ではない。δοκιμώτατοςとἄριστοςという二つの最上級形容詞は、δοκέωあるいはγιννώσκωとφρονέω、そしてその完成としてのσωφρονέωという人間の認識の位相にそれぞれ相応するものである。では、このようにして到達するとされる「一なる知」の妥当性について最後に考えたい。

断片101. ἐδίξησάμην ἔμεωυτόν..
私は私自身を探求した。

この断片は、ヘラクレイトス自身が「一なる知」を手に入れたことを宣するものであるだろう。というのも、第一に、「探求した（ἐδίξησάμην < δίξημαι）」という動詞がアオリスト形で使われており、このことは「探す」という動作が生起し終了したことを示すからである。すなわち、「私は探求し終えた」ということを意味するからである。注30に訳出を挙げた断片22の中にも同じ動詞が使われている。「黄金を探す人々は多くの土を掘り少しを見つける」というその内容は、比喩的に「一なる知」への前提として「博識」を容認するものであると同時に⁽³¹⁾、「探す」という労苦の困難さも示唆していると考えられる。労多くして実り少なきことが「探す」ことなのである。さらに、断片22は「探す」対象が黄金であり、それは土を掘ることで手に入れることができるものである。土を掘り下げ進む労働は、人間が行う一連の認識活動の変化、すなわち、δοκέω→γιννώσκω→φρονέω→σωφρονέωを暗示しているのではないだろうか。表土から下

方へという垂直方向の労働は、黄金を手に入れようとする限り止むことはなく、この意味で、その「深さ（βαθὺν）」は無限定である。「魂」には際限がなく、それが「深いロゴスを持つ」と断片45で述べられた内容と、土を掘り進む人間の姿は重複するものであろう。

断片101をヘラクレイトスの宣言であると考え第二の根拠は、「探す」対象として使われている再帰代名詞ἐμεωυτόνの持つ意味である。第2章に引用した断片116の中にも「知り思慮する」対象として再帰代名詞ἐωυτούςが使われ、σωφρονεῖνという人間の最高認識機能が保証されていた。ヘラクレイトスは終了した「探求」活動の目的語に「自己自身」を置いているのである⁽³²⁾。このことは、彼がσωφρονεῖνに到達したということであり、「万物が一であること」という「知」の本質を自分の中に見出したということであるだろう。自己探求の結果としての「知」発見ということである。しかし、彼の宣言を聞いても残る問題は、「万物が一である」という叙述の妥当性である。

ヘラクレイトスの認識論は、自然学的宇宙論からは切り離して考えることができない。このことは、認識主体である「魂」ですらも質料的制約を受けていることから明らかである。このことからすれば、彼の認識論は自然学的認識論であるといえるであろう。自然学の枠組みの中で人間を捉え、人間の認識を論ずるという点では、マクロコスモスとミクロコスモスが「ロゴス」という概念を結節点として同心円的二重構造をなしているといえるだろう。コスモスの中に私が存在しているということは同時に、私がコスモスであるということである。すなわち、万物の中に私が存することが、同時に私の中に万物が存するということである。「多」の中の「一」ではあっても、その「一」は「多」を包摂しているということである。

断片116の三人称複数再帰代名詞と断片101の一人称単数再帰代名詞の間には、「万物が一である」という「知」の最高点に達する単なる可能性に留まっている状態と、そこに達したという自覚の差が存すると考えられる。「一」を自分の中に発見する可能性を持ちながらも、一般の人々は「家畜の如く飽食している」（断片29）に過ぎない。彼の断片中に使われる「人間たち（ἄνθρωποι）」「多くの

人々 (πολλοί)」という用語と、「最高の人々 (οἱ ἄριστοι)」「一人の最高の人 (ἐὺν ἄριστος)」という用語も⁽³³⁾、万物の「多」に対する認識姿勢の相違を意図していると考えられる。ヘラクレイトスは、彼自身が後者に属することを断片101で宣したのである。

最後に付言しておきたい。ヘラクレイトスの認識論について論ずるに際して、著者は万物の「多」に対して「仮象」という言葉を用いなかった。そ

れは、「多」に対して「仮象」を用いることにより、「多」を認識することが虚偽、虚構でしかないと考えられることを避けるためである。「多」が「一」に包括されるものではあるにしても、「多」が虚であるとすれば、それは真としての「一」に覚醒する里程碑とならないであろう。ヘラクレイトスにあっては、刻々と変化し続ける万物の「多」そのものも「一」である以上、単なる仮象として拒否されるべきものではないと考えるためである。

表1：第2章引用断片中の用語解釈展開可能性

用語	断片番号	他断片での使用	解釈可能性
καθαίρονται	5	13	断片13をClem. Strom.I 2.の出典で読むならば、「豚は清水で清めるよりも、泥だらけになって喜ぶ」となる。その意味を理解していない人間たちや動物にとっては、本来清浄を目論む行為も、単なる狂気に捉われた愚行、あるいは逆に自分を汚濁の中に置くことになる。ヘラクレイトスが批判の対象者としている「最も評価を受けている人」の中にピュタゴラスがいる(断片40, 81, <129>)。ピュタゴラス学派のいわゆる「魂の浄化(καθαρισμός τῆς ψυχῆς)」やその著作であるΚαθαρμοίへの批判を想定しうる。
μαίνεσθαι	5	15, 92	断片15では、隊列をなして性器を讃歌するディオニュソス信者たちが「狂気の中にある」と述べられる。この後の背後にμαίνάς(ディオニュソス信者の狂女)が意識されていることは明らかである。彼らの行為の破廉恥さに加えて、ディオニュソス(生)とハデス(死)が同一たることを知らぬことが批判される。断片92では、神の託宣を受ける巫女であるシビュラの語り口が「狂気に捉われたもの」であるとされる。断片5と15では狂気が愚かさを意味すると考えられるのに対して、断片92での使用は、神託を語る狂気という点で肯定的解釈の余地を持つであろう。一種の神的憑依状態であ

			る狂乱を、ヘラクレイトスが区別していると考えられる。唾すべき狂気と聖なる狂気であろうか。
ἐπίστανται	57	41, 19	ἀπιστεύωとπιστεύωの変化形が断片41, 19で使用されている。前者は、知が一であること、そしてそのことは、万物が万物を通して如何に操られているかを知らぬという「智(γνώμη)」を信ずることであるとされる。難解な断片であるが、自分が見抜いた「何であるか」という「知」を、たとえ自分ひとりであっても保持することを意味するのであろうか。後者は、「聞き方も話し方も知らぬ人々」と、彼らの「ロゴス」理解のなさを不信、軽はずみとして批判的に述べている。ヘラクレイトスは、「信じること」と「信じないこと」という対立用語を「知」への堅実な志向の有無という含意で使っていると考ええる。しかし、妄信が狂気に変ずることは言を俟たない。
ἀπιστίη	86	19	
ἡμέρην	57	6, 67, 106	断片6, 67, 106で用いられている。一読すると、「日(太陽)は日々新しい」という断片6と、ヘシオドスへの批判根拠としての「すべての日が一たることを知らぬ」という断片106の内容が矛盾するとも思われる。しかし、ヘラクレイトスの宇宙論の中で、生成消滅変化する万物は、その変化相の下に「ロゴス(割合)」を持つ。「ロゴス」自体に変化がない以上、「日は毎日新しく(生まれるが)同じもの」と彼は考えていたのである。ところで、断片67でもこの語はεἰφρόνηと一組になって使われる。両断片共に現象する対立的組み合わせの中の一組として用いられているわけであるが、いま、ἡμέραをἡ+μέρα<μέροςと、下に論ずるように、εὐφρόνηをεὐ+φρονεῖνとそれぞれ読むならば、前者は「部分・分け前」、後者は「十分に考えること」という意味になる。「昼夜」の一致に「(人間の)部分と十分に考えること」の一致が含意されていることになる。

εὐφρόνην	57	26, 67	εὐφρόνηは「夜」という意味であり、断片26, 67でも用いられている。φρονεῖνは断片113において、「考えることが万人に共通である」と使われ、断片116と同様の内容を主張している。φρονεῖνに接頭辞が付加されたσωφρονεῖνは断片112でも使われ、「健全に思慮することが最大のよさ（人間にとっての徳）である」とされている。これら三つの用語の中に相関性を読みたい。古代ギリシア語において一般的に「夜」を表す言葉はνύξである。ヘラクレイトスは意図的にεὐφρόνηを選択使用したのではなかろうか。εὐφρόνηをεὐ+φρόνηと二分してみると、εὐ+φρονεῖνとの音韻上の近接性が生じる。意味も「十分に思慮すること」となる。これらの用語は、φρονεῖνからεὐφρονεῖνへ、さらにσωφρονεῖνへと深化展開する人間の認識能力の位相を表現していると考えられるであろう。
φρονέουσι	17	113	
σωφρονεῖν	116	112	
μέτεστι	116	30, 94	上に触れたように、断片116は断片112と非常に意味の上で接近している。健全に思慮することが万人に「分かたれて」おり、それが「最大のよさ」と言い換えられているからである。この語の派生語であるμέτρα<μέτρον《μετρέωが断片30, 94で用いられている。本文中で述べたように、この語は本来「定量性・割合の等しさ」を意味する。断片30が述べる燃焼と消化による「火」の定量性の不変や、断片94における「太陽ですらμέτραを踏み越えぬ」という表現が意図する「一定性・歩合」が本義である。人間認識の最高能力であるσωφρονεῖνが人間に「分かたれている」とは、その等価性の背後に能力の量的限界（部）を推測できるかもしれない。最高能力であるとはいえ、σωφρονεῖνも所詮「神の智であるγνώμη（<γιγνώσκω）に及ばぬ」（断片78）と彼は断ずるからである。また、μέτραとという語は、「共通な」という意味の形容詞であるκοινόςやξυνόςへと繋がる可能性を持つかもしれない。

注

- (1) B.Snell., *Die Entdeckung des Geistes. Studien zur Entstehung des Europäischen Denkens bei den Griechen.* Göttingen. 1980^s. s.26.
- (2) ヘラクレイトスの場合には、この語は否定的文脈の中で用いられている。この意味に関しては後述する。
- (3) Diels=Kranzに従えば126断片であるが、C.129を真正断片であるとすれば127となる。筆者はC.129を真正であると考え解釈に同意する。
- (4) ヘラクレイトスの断片中において「魂(ψυχή)」という言葉は、単数形でも複数形でも用いられている。Kahnらの研究者たちは、特に断片36との関連から、複数形であるψυχαίに大地や水と同様に自然の秩序を構成しているひとつの要素という意味を読み込もうとしている。しかし筆者は、Wheelwrightが主張した解釈に、すなわち、断片12, 77, 36の複数形は人間一般の「魂」を、断片117の単数形は唯一ψυχήという言葉を含む断片中で定冠詞を伴って使われていることから、ψυχήが個人の「魂」を意味しているとする解釈に同意する。

C.H.Kahn. *The Art and Thought of Heraclitus. An Edition of the Fragments with Translation and Commentary.* Cambridge. 1981 (pap.) . p.238.

P.Wheelwright. *Heraclitus.* Princeton. 1959. pp.160-61.
- (5) この断片の読みに関しては、さまざまな改竄が行われてきた。かつてξηρήを取り入れた際に、αῦηがαὐγήになったと考えられている。αὐγήを読むならば、断片は「乾いた光が最も賢く最善である」と訳出されることになる。この読みは、Plutarchusがαὐγήは「輝き」を意味していると考え、賢い「魂」は肉体という牢獄を突き破るとしたためである。しかし、彼自身においても *Rom.* c.28. においてはαῦτηとαῦηを同時に、*de Def. Orac.* 41.においてはαῦτηを読むという混乱が見られる。学説誌家たちにあっ

ては、Polyphriusはξηρή (*Antr. Nymph.* c. 11.) を、Philonはοὐ γῆ ξερή (*ap. Eus. P.E.* 8,14,67.) を、さらにClemensはαὐγή (*Paedog.* 2,156c.) を読んでいる。

Diels=kranz (s.177.) がαὐγή ξηρήという読みを取り、Kahn (*ibid.* p.76.) , Bollack=WismannもRobinsonもそれに従っている。

しかし筆者は、断片117, 118の出典がStobaeus. *Florilegium.* 5. 7.8.で同一であること、ヘラクレイトスにあっては「魂」が「火」と同一視されることはあっても、それが「光」を意図するとは考えられないことから、Kirk=Raven, Marcovich, Gigonに従ってαῦηを読む。

J.Bollack=H.Wismann. *Héraclite ou la séparation.* Paris. 1972. p.325.

T.M.Robinson. *Heraclitus.* Toronto. 1987. p.68.

G.S.Kirk=J.E.Raven. *The Presocratic Philosophers.* Cambridge. 1975^o. p.205.

M.Marcovich. *Heraclitus. Greek Text with a Short Commentary.* Merida. 1967. p.371.

O.Gigon. *Untersuchungen zu Heraklit.* Leipzig. 1935. s.110.

- (6) 乾湿という対立的性質は、同時に熱冷というやはり対立的性質を含意するものであることに注意せねばならない。
- (7) 断片30.「このコスモスは、それはすべてのものにとって同じものであるが、神々あるいは人間たちの誰かが作ったものではなく、それは常に存在したし、存在しているし、存在するであろう。(それは) 永遠に生きる火であり、定量だけ点火され、定量だけ消火される」

断片31a.「火の転化。最初は海、しかるに海から半分は土が、半分はプレーステールが…」

断片31b.「<土から>海は溶解され、土が生ずるより以前にそうだったと全く同じ割合で測定される」
- (8) 断片76.「火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死

を生きる」

断片76の真偽に関しては、それを真作と考える研究者の中に Nestle, Gigon (ibid.p.98f.), Guthrieがいる。それに対して、偽作と考える研究者は Zeller, Brieger, Kirk (ibid. p.342f.), Kahn (ibid. p.46.), Robinson (ibid. p.46.) らである。研究者における真偽判定の基準は、断片中の「空気(ἀήρ)」をストア学派による挿入と考えるかどうかという点に存する。断片の出典である Maximus Tyrius, Plutarchus, Marcus Aurelius を比較してみるならば、Maximus Tyrius においてのみ「生と死」という対立関係が用いられていることが分かる。それに対して、残りのものにおいては、「誕生と死」という用語が対立関係をなしている。「誕生と死」という用語を用いる Marcus Aurelius の読みに関しては、同じ出典を持つ断片71, 72, 73との連続性が考えられ、睡眠と覚醒との類比に基づいて、断片76における用語選択がなされたと考える。

W.K.C.Guthrie. *A History of Greek History*. I. *The Earlier Presocratics and the Pythagoreans*. Cambridge. 1962. p.453. n.2.

W.Nestle. *Die Vorsokratiker*. Darmstadt. 1969⁴. s.108.

E.Zeller=W.Nestle. *Die Philosophie der Griechen in ihre geschichtlichen Entwicklung*. Hildesheim. 1990⁶ (2 Nachdruck). s.815. n.2.

A.Brieger. Die Grundzüge der Heraklitischen Physik. *Hermes*. 39 (1904). s.208.

- (9) 「火」と「魂」を同等視する際に、必然的に次の問題が生起するであろう。すなわち、断片31aにある「火の転化(πυρὸς τροπαί)」により万物の生成消滅を説明する図式からするならば、生命を持つすべての存在にヘラクレイトスが「魂」を認めていたのかという問いが成り立つであろう。彼の諸断片中に、直接この問題を解決する手掛かりは残されていない。しかし、植物はさておき、猿や豚といった動物と人間を比較している複数の断片が存することから、劣ったもの

ではあるにしても何らかの「認識する」—より厳密に言うならば、「感覚する」であろう—という営為を、それらが行っていることをヘラクレイトスが了解していたと推測できるであろう。

「魂」が火的性質を持つという観点については、M.S.Huber. *Heraklit. Der Werdegang des Weisen*. Grüner. 1996. s.211-214.も参照。

- (10) 「バルバロス」に対して「共通ギリシア語(Koinós)」がある。さらに、κοινόςがξυνόςと意味上はほとんど変わらず用いられていたことを考え合わせれば、単にβαρβάρος⇔Koinósという対比に留まらず、βαρβάρος⇔ξυνόςでもあると考えることができる。前者は、非ギリシア的⇔共通ギリシア的という一見すれば明瞭な対置であるといえるだろう。しかし、後者は、ヘラクレイトス断片中における否定的文脈内での使用に着目するとき、単にギリシア語を使用するがゆえに優秀であるとはいえず、本文で論ずるように、「隠れることを好む自然<本性>(φύσις)」(断片123)を見抜くことができる極めて少数なる者にのみ、真にκοινός λόγος(共通なるロゴス)を認めようとするヘラクレイトスの意図を窺うことができるかもしれない。この場合には、βαρβάρος+οἱ πολλοί(≒οὐ Κοινός)⇔κοινός λόγοςという対応関係となる。バルバロスはもちろん、多くの人々に対するコメントとして「聞くことも話すこともできぬ者たち」(断片19)を読むことができるであろう。

- (11) 断片79.「神の前では大人も子供に見える。ちょうど、大人の前では子供が(そのように見えるのと)同様に」
少なくとも身体的成長が停止するということを質料的調和の頂点であると考えた限り、ヘラクレイトスは、大人(成人)が未熟なる子供に対しては絶対的優位に立っているとみなしている。その懸隔は、この断片79によれば、本来は越えられてはならぬものである。しかし、醜悪することによって逆転が生起するのである。

- (12) II. 8.478.「大地や海の果て(πείραθ')

- (13) frr. 1.2.31.39.45.50.72.81.87.108.115.
- (14) *D.L.*, IX. 6.
- (15) oraitoとしての「ロゴス」：断片1.2.39.45.50.87.108.115.
ratioとしての「ロゴス」：断片31a.31b.45.94.115.
- (16) ヘラクレイトスは、断片1で人間を「ロゴスを聞いて理解しない」と批判している。常態にあっても聞くことのできない人間が、その「魂」を湿らせるのであるから、その様態は「バルバロス」と同定されうる。また、この断片には、ひとつひとつの言葉を意図していると考えられるἐπέων<ἔποςも使われている。これら二語の同時使用は、彼がλόγοςには言語一般という意味を、ἔποςに個別の言葉という意味を区別していると筆者は考えている。
cf: J.Bryan. *Likeness and Likelihood in the Presocratics and Plato*. Cambridge. 2012. p.109.
- (17) 断片106. Ἡσιόωι ... ἀγνοοῦντι φύσιν ἡμέρας ἀπάσης μίαν οὔσαν.
ヘシオドスは、すべての日が一であることを知らない。
この断片中には否定辞は使用されていない。しかし、動詞自体がἀγνοοῦντι<ἀγνοέω=ἀ+γνοέωであり、「知覚しない」という意味であることから、やはりヘラクレイトスは「知る」ことを否定的文脈で語っていることになる。
- (18) 「犬に誓って」宣誓するという古代ギリシア語表現を想起するならば、宣言を翻すことは最低の生き物である犬にすら劣ることになってしまう。
- (19) 宗教的儀礼に対するヘラクレイトスの嫌悪と、それを実践する人間たちへの冷徹な言葉は、断片14.15.104にも読むことができる。
cf: Kahn. *ibid.* p.266.
- (20) 断片13.「豚は清水で清めるよりも、泥だらけになることを喜ぶ」
人間から見れば愚かな豚の行為も、豚にとっては快なのである。
- (21) ホメロスが断片42.56. (105) で、ヘシオドスが断片40.57.106で、ピュタゴラスが断片40.81.129で、クセノファネスが断片40で、ヘカタイオスが断片40で、アルキロコスが断片42に名を挙げられている。彼らは、叙事詩人、哲学者、歴史家、哀歌詩人である。
cf: P.Thanassas. *Die erste <zweite Fahrt>. Sein des Seienden und Erscheinen der Welt bei Parmenides*. Tübingen. 1996. s.46.
- (22) 断片88.「生者死者、覚醒睡眠、若さと老いは同じである。というのも、前者が後者へ変化し、逆に、後者が前者へ変化するからである」
この断片の読みに関しては、ひとつには、Kranzのように対立の組をすべて無冠詞で読む立場がある。この考え方は、人間が一方向でしか経験できないような対立関係において、無冠詞で用いられた中性分詞が実名詞として用いられていることから、ヘラクレイトスが経験の対象を完全に実在的なものとして表現しようとしたと考えるものである。
これに対して、生者死者、若さと老いという二組の対立関係と、覚醒睡眠という対立関係を可逆的に人間が経験できるかどうかという点において彼が区別したかもしれないとして、定冠詞τὸを後者の組に付す立場がある。筆者も後者に同意する。
W.Kranz. *Die Fragmente der Vorsokratiker*. Berlin. 1974⁷. s.170-71.
cf: Kahn. *ibid.* p.70.
G.S.Kirk. *Heraclitus. The Cosmic Fragments*. Cambridge. 1978⁵. p.138.
- (23) 断片126.「冷たいものは温かくなり、温かいものは冷たくなる。湿ったものは乾き、乾いたものは湿る」
- (24) 断片43.「傲慢は大火よりもはるかに消されるべきである」
断片85.「欲望と戦うことは難しいことである。というのも、それは臨むものを魂を犠牲にして贖うからである」
- (25) 断片30では、その形容詞形μέτρονが用いられており、そこではコスモス内での四元素間の相互変化の中にある定量性、等価性が語られる。
- (26) 「ロゴス」が理法性、すなわちratioという意

味で使われているものは、断片31a.31b.45.94.115.である。

Guthrieは、紀元前5世紀における「ロゴス」という言葉の意味を11通り例示している。筆者の行うoratioとratioという「ロゴス」分類は、彼の分類では(1)(2)(4)と、(5)(6)(7)(8)(9)に相当すると考えられる。

Guthrie. *ibid.* pp.420-424.

- (27) 「ロゴス」についての二面的解釈について、Kahnは「ヘラクレイトスは、自分の話というロゴスの具体的な使用の背後に、事物と一緒に集めるといふ、二つの相互に関連した意味を置いている。ひとつには、人間の話としての「ロゴス」は、単語や言葉遊びの中に多くの意味を集めることを意味し、ひとつには、世界の「根拠」としての「ロゴス」は、定量や割合によって算出された事物の集合的結合を意図する」と述べている。

C.H.Kahn. *A New Look at Heraclitus. American Philosophical Quarterly*. 1, 1964. p.193.

cf: J.Palmer. *Parmenides & Presocratic Philosophy*. 2012(pap.). Oxford. pp.344-45.

- (28) ヘラクレイトスに僅かに先行するクセノファネスは、人間「知」を漸進的に増加するものと考えている。しかし、彼における人間「知」は未だ量的「知」に留まるものである。クセノファネス断片18。「神々は最初からすべてのことを人間たちには示さなかった。そうではなくて、探求しながら時間と共に善きものを見つけ出すのである」

両者の人間「知」を巡る議論に関しては、拙稿「人間の知は深化するかークセノファネスとヘラクレイトスの断片を手掛かりにしてー」『総合人間科学』第3巻、東亜大学、2003、pp.49-62.を参照いただきたい。

- (29) 「博識 (πολυμαθία)」という用語は断片57と40に現れている。前者は本文で引用したようにヘシオドス批判の背景として使われ、後者は注(21)に挙げたように、ヘシオドスを含む4名を批判する根拠としての役割を負っている。断片40においては「博識がノースを持つこと (νόον ἔχειν) を教えない」ということが根拠となっていることに注意したい。「多」

ではなく「一」を見抜くことが「知る」ことであると彼が語る時、「多くを+学んだこと」であるπολυ+μαθίαが否定されることは了解できる。問題は「ノースを持つこと」と「一」との関係である。φρονεῖνからσωφρονεῖνへと「魂」が働くことが「一」へ向かうことであるとすれば、「ノースを持つこと」とφρονεῖνあるいはσωφρονεῖνとの関係が問われねばならない。この問題については、νόος (=νοῦς) < νοέω がφρονεῖν やσωφρονεῖν と同義であることにより、両者の置換蓋然性を認めることができる。と考える。

cf: H.Jones. *-sis Nouns in Heraclitus. Museum Africum*. 3 (1974) . p.8.

- (30) ヘラクレイトスは一概に量的知識の多さを否定するわけではない。「一」への前提としての「多」は必要条件である。

断片22。「黄金を探す人々 (διζήμενοι) は多く (πολλήν) の土を掘り少しを見つける」

断片35。「知を愛する人は、多くのこと (πολλῶν) を学ばねばならない」

- (31) 「黄金」という用語は断片9の中でも使われている。この断片の背後に隠されていると思われるヘラクレイトスの揶揄を忖度してみれば、ロバは「バルバロイ」であり「酩酊した大人」であり「何であるか」を知らぬ人々の姿ではないだろうか。

断片9。「ロバは黄金よりもむしろ藁を好む」

- (32) Huberは、外界の万物から内的世界へ人間の認識が「転回 (Wendung)」すると述べる。そして、ἐμειωτόνを最早ヘラクレイトス個人ではなく、非人格的自己と解釈する。しかし、筆者はあくまでἐμειωτόνをヘラクレイトス個人として解する立場をとる。

Huber. *ibid.* s.220-23.

- (33) 断片29。「最高の人々はすべてを捨ててもひとつを選ぶ。…しかし、多くの人々は家畜の如く飽食している」

断片49. 本文前出

Epistemology of Heraclitus

GOTO Jun

Faculty of Human Sciences, Department of Humanities and Culture

University of East Asia

jung510@toua-u.ac.jp

Abstract

In this article the epistemology of Heraclitus is discussed. We are to understand that his epistemology consists in the cosmological worldview.

Heraclitus set the human soul ($\psi\upsilon\chi\eta$) as the subject of recognition. As the soul has the same material quality as the fire ($\pi\upsilon\rho$), the cosmological substance, its conditional changes are due to those of fire. He guaranteed the deepening of the human ability of recognition, though our soul is to be restricted by its material character.

As for 'to recognize something', the content-level changes itself according to the aspects of recognizing 'what it is'. He expressed this by using these verbs, $\delta\omicron\kappa\acute{\epsilon}\omega$, $\gamma\iota\gamma\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$ and $\phi\rho\nu\acute{\epsilon}\omega$. The verbal usage means that the level of recognition is changeable between the lower and the upper, that is, between 'to get the shallow information about the object' and 'to consider the hidden meaning of the identity of opposites'. The highest is to recognize 'All is One'.

His saying 'All is One' is to connect Many with One, and is counted as one of the first suggestions concerning to the problem between 'One and Many' in the history of epistemology. From his point of view, all (=many) is one because all things are from one ever-living fire. When the material quality of our soul is almost similar to that of fire, that is, when the level of recognition is $\phi\rho\nu\acute{\epsilon}\omega$, we can penetrate the many only to get the wisdom 'All is One'. In fragment 101 he said "I searched myself". He blamed many people for their ways of recognition. We could take this fragment for his declaration to reach the wisdom.